

綾歌町内遺跡発掘調査報告書

第 6 集

平成 13 年度国庫補助事業報告書
快天山古墳
定連池東丘古墳群

2002. 3

綾歌町教育委員会

はじめに

我が綾歌町には、縄文時代晚期以降の各時代に、先人の手によって築かれた文化遺産が数多く残されています。なかでも弥生時代後半期から古墳時代前半期にかけては、近年の発掘調査により、かなり密度の高い内容であることが確認されています。町及びその他の開発事業等に伴って発掘調査された様々な遺跡について、さらに調査研究を重ね、古代の生活等を明らかにするとともに、遺跡の保護・活用を図り、永く後世に伝えることは、私達に課せられた使命であると考えます。

綾歌町教育委員会では、平成8年度より国庫補助ならびに県費補助によって綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても、継続して実施した調査成果として、この報告書を発刊することになりました。

今年度は、前期古墳として四国を代表する快天山古墳の測量調査および確認調査を実施し、これまでに実施されている調査成果の補足とするとともに、快天山古墳の本格的整備調査に向けた基礎調査としました。快天山古墳は、国内最古の削抜式割竹形石棺を3基保有し、規模的にも前期古墳としては中・四国最大であり、本古墳の内容解明が、香川県の古墳形成時期の社会背景を解明する手がかりになるとと考えています。

また、開発に伴う事前調査として、定迹池東丘古墳群の確認調査を実施した結果、古墳時代後期に築造された横穴式石室が確認されました。この付近には、畦田古墳群、宇門神社古墳、熊倉池東古墳があり古墳時代後期の関連性の解明に期待が高まります。

これからも、我が綾歌町に所在する貴重な文化遺産を、後世に伝えていくためにも、調査の成果が貴重な資料として活用されることを望みつつ、当事業の継続的な実施を予定しております。

最後になりましたが、これらの調査に当たりましてご理解とご指導をいただきました香川県教育委員会文化行政課をはじめ関係各位、また調査にご協力とご援助をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

平成14年3月31日

綾歌町教育委員会教育長 土岐道憲



例　　言

1. 本書は、綾歌町教育委員会が、平成13年度国庫補助事業として実施した綾歌町内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、快天山古墳、定連池東丘古墳群を対象とした。
3. 快天山古墳の測量調査、遺物整理、実測及び本書の執筆については、徳島文理大学助教授大久保徹也氏が、定連池東丘古墳の測量調査、実測及び本書の執筆、編集について、綾歌町教育委員会近藤武司、新居勉がそれぞれ分担した。
4. 本書の実測図の縮尺は、すべてスケールで表示した。また遺構実測図中の方位は快天山古墳については、国土座標第IV系による方位で、定連池東丘古墳については、磁針方位で示した。
5. 出土遺物及び図面は、綾歌町教育委員会に保管している。
6. 快天山古墳測量調査・墳丘確認調査にあたっては、徳島文理大学助教授大久保徹也氏及び徳島文理大学学生諸氏のご指導・ご協力を得た。ここに記して謝意を表する。
7. 押図については、国土地理院の25,000分の1地形図を調整した綾歌町管内図（承認番号 四複第134号）及び綾歌町航空測量図を使用した。

目 次

本 文 目 次

第Ⅰ章 平成13年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要	1
第Ⅱ章 快天山古墳測量調査・墳丘確認調査	4
1. 位置と環境	4
2. 快天山古墳の現況	5
3. 調査の経過	8
4. 調査の概要	8
5. 本年度調査のまとめ	15
第Ⅲ章 定連池東丘古墳群確認調査	20
1. 地理的環境	20
2. 歴史的環境	20
3. 調査に至る経緯	21
4. 調査結果の概要	23
5. まとめ	30
第Ⅳ章 まとめ	33

図 版 目 次

図版 1 第5トレンチ：後円部南(南から)	18
図版 2 第3トレンチ：後円部西(西から)	18
図版 3 第1トレンチ落ち込み部埴輪出土状態(北から)	19
図版 4 第1トレンチ落ち込み(西から)	19
図版 5 第1トレンチ落ち込み(北から)	19
図版 6 第6トレンチ(西から)	19
図版 7 第2トレンチ葺石(西から)	19
図版 8 第2トレンチ埴輪樹立状態(南から)	19
図版 9 第2トレンチ葺石と埴輪(南から)	19
図版 10 第4トレンチ傾斜変換点(東から)	19
図版 11 伐開作業風景	32
図版 12 第3トレンチ完掘状況(東から)	32
図版 13 第8トレンチ完掘状況(西から)	32
図版 14 第8トレンチ検出土坑墓(北西から)	32
図版 15 第5トレンチ狭道部側壁(西から)	32
図版 16 第9トレンチ墳丘断面(西から)	32

挿 図 目 次

第 1 図 平成 13 年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地	3
第 2 図 快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓	5
第 3 図 快天山古墳測量図	6
第 4 図 快天山古墳基準杭配置図	8
第 5 図 第 1 トレンチ 平・断面図	9
第 6 図 第 6 トレンチ 平・断面図	10
第 7 図 第 2 トレンチ 平・断面図	10
第 8 図 第 2 トレンチ 奈石平・立面図	11
第 9 図 第 3 トレンチ 平・断面図	12
第 10 図 第 4 トレンチ 平・断面図	13
第 11 図 第 5 トレンチ 平・断面図	14
第 12 図 出土遺物実測図 1	15
第 13 図 出土遺物実測図 2	16
第 14 図 定連池東丘古墳群 測量・トレンチ配置図	22
第 15 図 第 10 トレンチ 平・断面図	23
第 16 図 第 1 トレンチ 平・断面図	24
第 17 図 第 2 トレンチ 平・断面図	25
第 18 図 第 6 トレンチ 平・断面図	25
第 19 図 第 7 トレンチ 平・断面図	26
第 20 図 第 8 トレンチ 平・断面図	27
第 21 図 第 3 トレンチ 断面図	28
第 22 図 第 4 トレンチ 断面図	28
第 23 図 第 9 トレンチ 断面図〔分割〕	29
第 24 図 第 9 トレンチ 断面図〔全体〕	30
第 25 図 熊倉縄張り図	30

第Ⅰ章 平成13年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要

平成8年度から国庫及び県費補助金によって、綾歌町内に所在する遺跡の確認調査を実施しており、今年度についても同事業を継続して実施することになった。

国庫補助申請については、平成13年4月11日付けで提出し、平成13年6月5日付で交付決定を受けた。

県費補助申請についても、同じく平成13年4月11日付けで提出し、平成13年8月9日付で交付決定を受けた。

今年度については、栗熊東字若狭所在の快天山古墳墳丘測量調査及び墳丘確認調査と、開発に伴う栗熊西字熊倉所在の定連池東丘古墳群の試掘確認調査という2件の調査を実施した。

快天山古墳は、昭和25年香川県教育委員会が発掘調査を実施し、その内容は、『香川県史跡名勝天然記念物調査報告書第15』(昭和26年)に記載されている。さらに、昭和26年京都大学考古学教室が再調査を実施している。

快天山古墳は、その主体部を中心とした内容について全国的に見ても非常に重要な性格であるが、特段の保護措置がなされていなかった。近年になり地元の保存及び保護に対する活動が活発になってきており、平成11年2月5日付けで綾歌町史跡として指定を受けることとなった。

町教委としては、快天山古墳が町指定史跡となったことで文化財保護における網掛けはできたと考えているが、より良い保存及び活用に向けた整備を進めるためにはできる限り早い時期に土地の公有化を図ることが先決であると考えており、町指定のみならず上位指定を受けるのが適当であるとの判断から、これまで不確定であった墳丘の形状及びその規模また、構造についての確認をするための調査を実施することとした。

調査方法は、墳丘の規模形状を確認するために、まず平板による地形測量を実施した。その段階で快天山古墳は前方後円墳であることの推測を立てて、検討した箇所に試掘トレチを設定した。

その結果、快天山古墳の後円部の南先端部及び西側で墳裾と考えられる地山の傾斜変換点が確認できた。また、西側前方部のくびれ部付近では葺石とテラス部を、また、そのテラス部には樹立した円筒埴輪を確認することができた。

更に、前方部先端では、僅かに地山を削り込む落ち込みを検出した。

これらのこととを総合して考えると、快天山古墳は全長100m、後円部径約60mの前方後円墳であることが判明した。構造としては、少なくとも前方部に埴輪を並べたテラスが所在し、その斜面部には葺石が敷き詰められていることが確認された。昭和に行われた調査の内容と併せて考えると、快天山古墳の築造時期については古墳時代前期後半で、当時の前方後円墳としては四国最大規模を誇るものであることが確定された。

町では、次年度以降も継続して調査を実施し、他の箇所についても構造解明できるよう努めていきたい。

定連池東丘古墳群は、以前からその所在が報告されていたが、その具体的な調査はなされていなかったことから内容については不明確であった。唯一、平成6年度の調査でその

れていなかったことから内容については不明確であった。唯一、平成6年度の調査でその北端に位置する1号墳が1辺9mを測る葺石を3段に配置する方墳であることが判っているだけである。

付近には、宇門神社古墳、定連遺跡、平尾墳墓群、畦田古墳群、熊倉池東古墳といった弥生から古墳期に築造された墳丘墓及び古墳が多く所在しており、当該地についても古墳等の所在が容易に推測される。

今回の開発が計画されたことによって、1号墳以南の未調査部分についての事前分布調査に踏み切ることになった。

調査方法は、まず踏査による調査範囲の選定を行った後、平板地形測量を実施した上で必要な箇所に試掘トレンチを設定した。

試掘トレンチは、計10本設定することになった。

調査の結果、2号墳は構成の破壊が進んでいるものの主体部に土坑墓が並列して2基所在していることが判った。また、3号墳については、土坑墓の可能性のある落ち込みが確認された。いずれも遺物の混入がないことから時期の特定には至らなかった。

4号墳は、古墳時代後期に築造された横穴式石室を主体部を持つ古墳であることが判った。周溝を備えており径9~10mの円墳である可能性が強い。

今回の調査で確認された3基の古墳群は、いずれも相当な破壊を受けており保存状態が良くないが、貴重な資料であることに変わりはないので、開発業者との協議の中で適切な保存に努めていきたい。

以上、町内2箇所で発掘調査を実施し、掘削による調査総面積は150m²であった。また、平板測量を快天山古墳では約15,000m²、定連池東丘古墳群では約3,000m²の範囲で実施した。

平成13年度の町内遺跡発掘調査事業は、平成13年4月2日より実施し、平成14年3月31日に終了した。

第1図 平成13年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地



快 天 山 古 墳

第 II 章 快天山古墳測量調査・墳丘確認調査

調査対象地 綾歌町栗熊東字若狭
調査期間 平成13年4月2日～8月10日
調査面積 60m²

1. 位置と環境

快天山古墳は北緯 $34^{\circ} 13' 57''$ 、東経 $133^{\circ} 53' 30''$ に位置する。讃岐中部の丸龜平野南部にあって綾川上流域の羽床盆地と大東川上流域を画する横山山塊最南端の丘陵上に所在する。山塊南縁は細かく開析され小丘陵が手指状に並ぶが、本古墳はそうした丘陵の一つの尾根先端部を利用して築かれた大型の前方後円墳である。綾川水系の羽床盆地に対する眺望は堤山等に遮られ、その一部を垣間見るに過ぎないが、南～西方向の視界は概ね開け、大東川上流域の栗熊・富熊地域から岡田台地一帯を広く望むことができる。

古墳は後円部を南、すなわち丘陵先端に向かって、前方部を北に向ける。後円部頂は標高75.3mを測り、周囲の水田面との比高はおよそ4.0mで、南方の平地側からは後円部の圧倒的な質感を仰ぎ見ることができる。

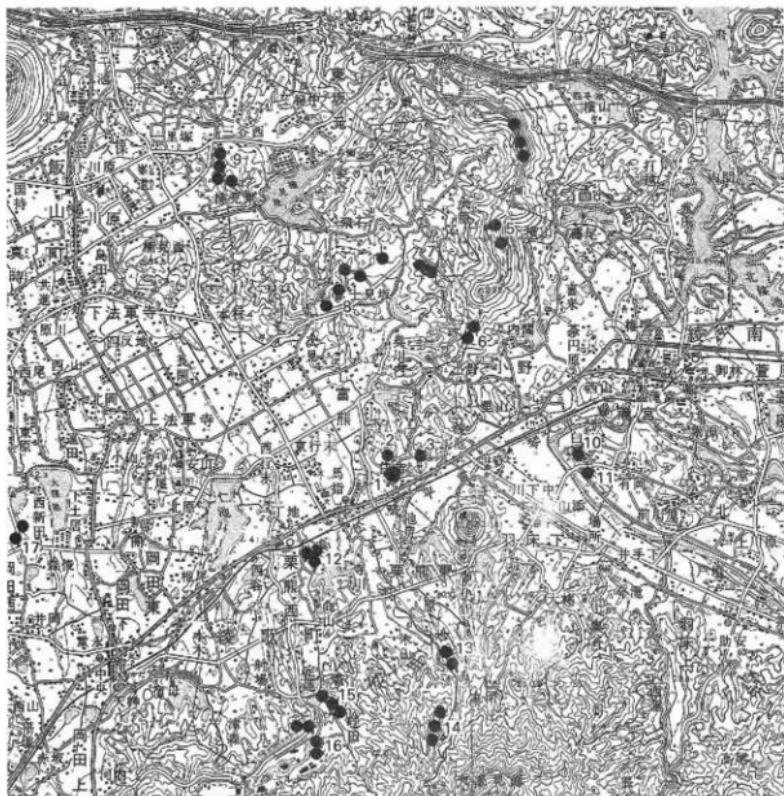
北方の横山山塊の高所には、横山経塚、横峰、奥川内、陣ノ丸、地神山といった古墳群が分布する。このうち横山経塚は前方後円墳を含む積石墳墓群である。また陣ノ丸古墳群では2基、奥川内古墳群では1基の盛土前方後円墳を含む。これらの前方後円墳は、いずれも軸長4.0m以下で立地等から古墳時代前期に遡ると見られ、快天山古墳に先行する可能性が高いであろう。地神山古墳群は中期後半～後期前半に下ると見られ、小型前方後円墳を含むという。

これに対して丘陵南縁にはより劣位の無墳丘箱式石棺もしくは小型墳墓が散在する。快天山古墳に接した尾根伝いの北方約100mの地点には、安山岩板石で構築した精美な竪穴石槨を中心とする墳形・規模不詳の薬師山古墳がかつて存在した。東隣尾根先端の住吉神社背後から箱式石棺が見つかっている。快天山古墳前方部に接して5基の箱式石棺群が開墾時に確認されており、うち一基から小型仿製鏡が出土している。また後円部南斜面の開墾時にも硬玉製勾玉の出土が伝えられており、この部分にも同様の埋葬群が所在した可能性がある。これらに関する情報は乏しいが、その多くは中期前半以前に比定しうるものとみられる。

また栗熊低地を挟んで南方の高見峰山麓には小型前方後円墳を含む石塚山古墳群・平尾墳墓群や、定連池東丘古墳群・休場池東丘古墳群・原竜王山古墳群などの小規模墳墓群の複数の系列が分布する。これらの形成は古墳時代前期を中心とし、定連池東丘古墳群・平尾墳墓群のように始点が弥生後期に遡るものと含む。横山山塊の墳墓群より早く形成を始めるが、やはり中期後半以降には継続しないようだ。

中期後半～後期前半の墳墓群は羽床盆地縁辺部と岡田台地に集中し、横山山塊・大高見峰北麓では希薄となる。羽床盆地では段丘縁辺部に円墳が群集するが、確実な前方後円墳を含まない。津頭東古墳の築造が前期に遡るもの、大多数は中期後半から後期前半の所産となる。同様に岡田台地でもその時期に車塚古墳を盟主とする万塚古墳群が形成される。

後期後半段階には、宇門神社古墳などの横穴式石室墳が再び大高見峰北麓に築かれるが、大規模な群集は認められない。

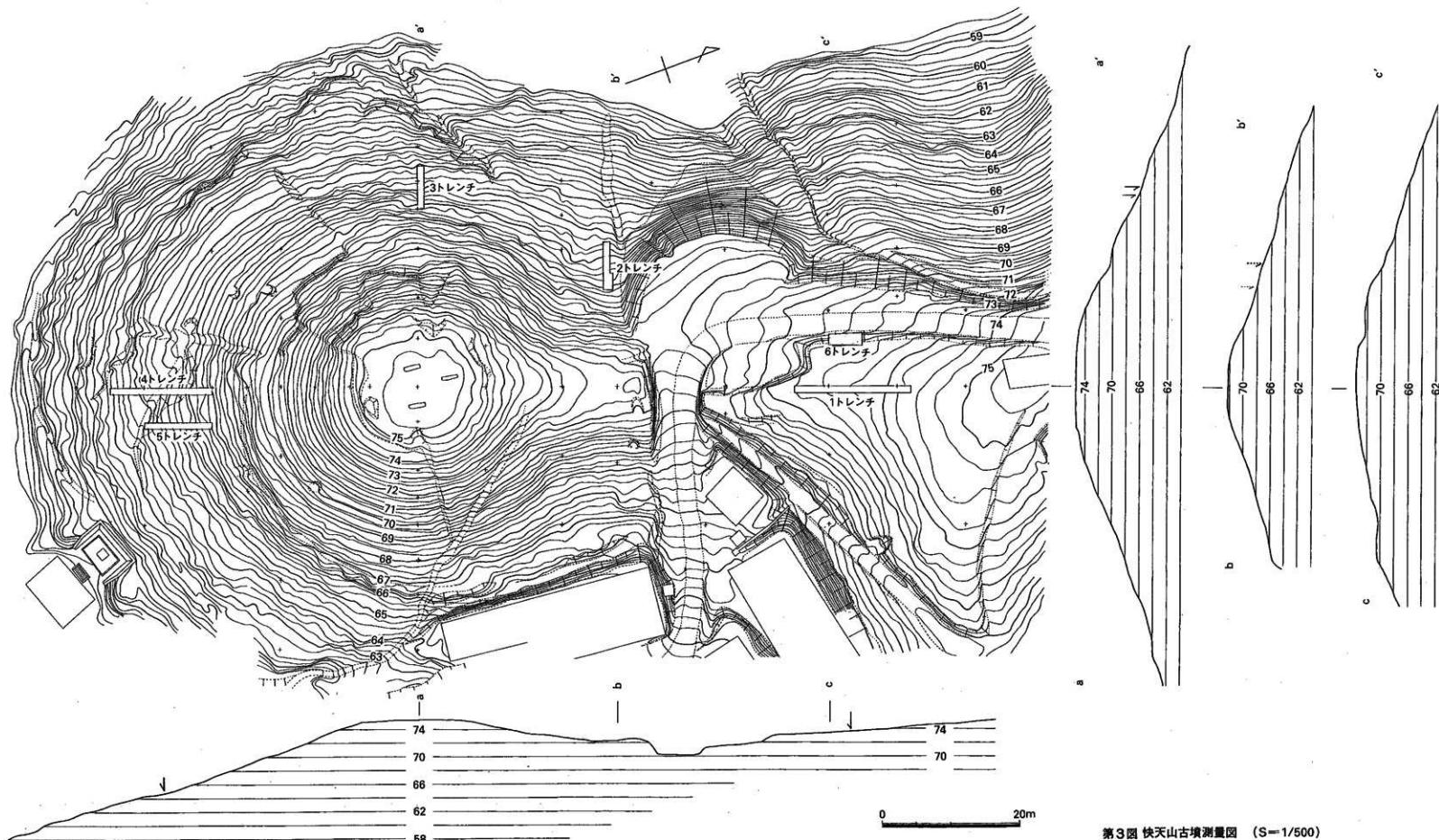


1. 快天山古墳 2. 麋跡山古墳 3. 佐古神社旗上古墳 4. 横立山経塚古墳群
 5. 横峰古墳群 6. 奥川内古墳群 7. 阵ノ丸古墳群 8. 地神山古墳群
 9. 城山古墳群 10. 津頭西古墳 11. 津頭東古墳 12. 石塚山古墳群
 13. 原竜王山古墳群 14. 休場池東古墳群 15. 定蓮池東古墳群 16. 平尾古墳群
 17. 岡田万塚古墳群

第2図 快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓(S=1/50000)

2. 快天山古墳の現況

快天山古墳背後の丘陵一帯は1970年代に大規模な農地開発の対象となり、その影響は残念ながら本墳前方部まで及んでいる。この部分では尾根頂部が削平開墾されると共に農道整備と養鶏場の設置で前方部の中程が切断され、農道西側の前方部側面は厚い建設残土の堆積に覆われている。この折に前方部に接した箱式石棺群も滅失したとされる。また近年では丘陵裾には新興住宅地が広がりつつある。しかし、墳頂に本古墳の名称の謂われとなった旧円福寺の僧侶快天以下の墓石が並び、後円部南斜面に住吉神社御旅所が設けられ



第3図 快天山古墳測量図 (S=1/500)

ていることもあるって、後円部へくびれ部が戦前から戦後の一時期にかけて畠地化されたものの、現在は山林に覆われ、前方部ほどの極端な改変を経っていない。

後円部東～南斜面の広い範囲は墳頂平坦面に接する部分まで、かつて開墾されており細かな歴の痕跡が整然と並んでいる。また墳丘裾付近は連続的に切り込まれ、やはり畑地を造成した形跡が残る。西斜面では同様の痕跡は顕著ではないが、正面上半部の隨所に土砂崩落痕跡が認められ、畑地化していない分墳丘の自然崩壊が目につく。後円部斜面のこうした状況に比べ、東西両側面ともにくびれ部～前方部南半部は最も本来的な形状が保たれているようだ。

3. 調査の経過

本年度は、4～5月に墳丘測量調査を行い、続く7～8月に第一次の墳丘規模確認調査を実施した。測量調査では、周辺地形を重視して快天山古墳の周囲約南北150m×東西100mの範囲を、平板測量方式で測り、縮尺1/100、2.5cm等高線で図化した。

第一次墳丘範囲確認調査では次節で述べるように、後円部南側・西側、前方部西側 前方部北側の4地点に計6箇所の調査トレンチを設定して作業を進めた。初回確認調査のため、慎重を期して各地点の堆積状況等の把握に重視したため、各トレンチは原則として幅1mで設定した。全体の調査面積は約60m²となる。



第4図 桂天山古墳基準杭配置図

4. 調査の概要

第一次確認調査では当初4本の調査トレンチを設定したが、後世の改変によって充分な目的を達せなかつた部分についてさらに2本を追加した。設定したトレンチは次のとおりである。

(配置は第2・3図参照)

第1トレーナー 前方部北 幅1m延長

1. 5 m × 延長 7 m 蓋石下端
かトゾ接觸傾斜変換点検出

第3 トレンチ 後円部西 幅 1m×延長 6m 盛土層末端 墳端傾斜変換点検出

第4トレーナー 後円部南 幅1m×延長1.5m 墓端傾斜変換点検出

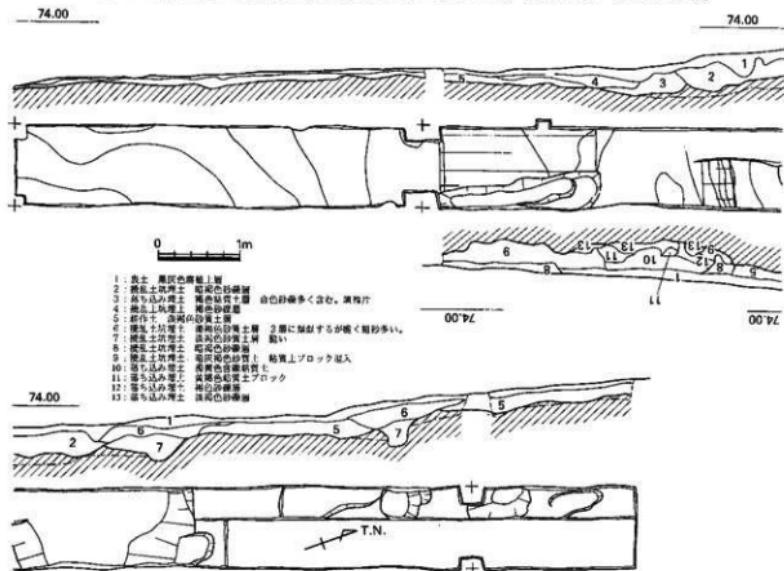
第5 トレンチ 後円部南 幅1m×延長1.0m

第6トレンチ 前方部北 幅1.2~ 1.5m×延長5m

以下、各トレーニングの調査所見について述べる。

a. 第1トレンチ (第5図)

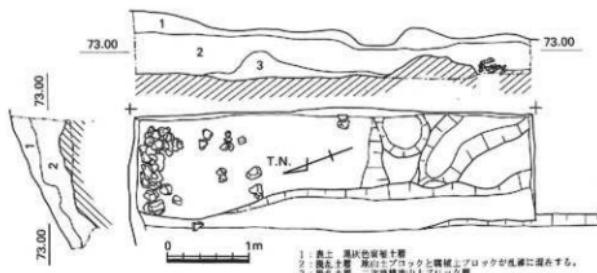
前方部前端の確認を目的として、主軸ライン上でNo.3杭北2mからK3杭の南5mまで延長17mのトレンチを設定した。K3杭以南では表土直下で風化の進まない花崗岩ばかり上層が検出された。この部分では地山面は、地勢に応じてごくわずかながら南に下がる。ほぼK3杭を境にそれより以北では大小様々な不定形な擾乱坑が至る所に見出される。それらの多くではビニール断片なども見出されることなどからごく近年の所産と推測される。特にK3杭北3m以北ではそれが甚だしくほとんど旧状をとどめないことが判明したので、この部分では部分的な掘り下げにとどめた。このような擾乱と重複しつつ、K3杭を南端として幅3.8mで深さ20cmほどのきわめて浅い地山の落ち込みをかろうじて確認することができた。多数の擾乱坑と重なり合い、詳細な形状の復元は困難であるが、この落ち込み部あるいはこれに接した擾乱土坑に限って、埴輪片及び葺石様の石材を相当量包含することも留意して、断定しがたいもののこの部分が前方部前端を反映する可能性を想定しておきたい。なお落ち込み最深部は後円部中心点の北6.2m、標高73.1mとなる。



第5図 第1トレンチ 平・断面図(S=1/60)

b. 第6トレンチ (第6図)

第1トレンチで検出した落ち込み部分の延長を確認するためにK3杭の西5mを起点に北に延長5mで第6トレンチを設定した。前方部西半部を削って南北に延びる農道の法面部分に相当する。しかしながらこの部分では農道設置時の削平と残土の再堆積が著しく期待した落ち込みの連続は確認できなかった。ただし本トレンチにおいても再堆積土中に小片ではあるが円筒埴輪片と拳大～小兒頭大の葺石様石材多数が含まれていた。



第6図 第6トレンチ 平・断面図 (S=1/60)

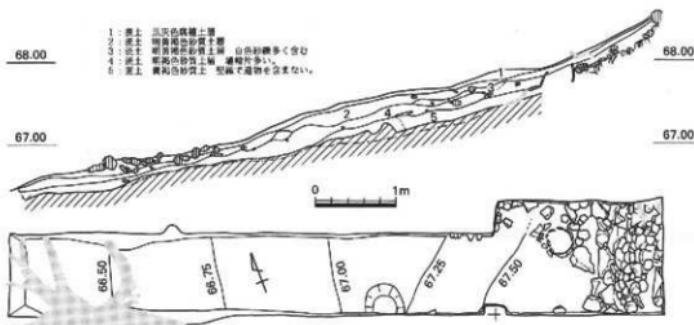
c. 第2トレンチ (第7・8回)

前方部西側面墳壠を確認するためにK7-K8ラインの北6mで主軸ラインの西1.4mを起点に延長7mで設定した東西方向トレンチである。前回調査ではこの付近で円筒埴輪列を検出している。

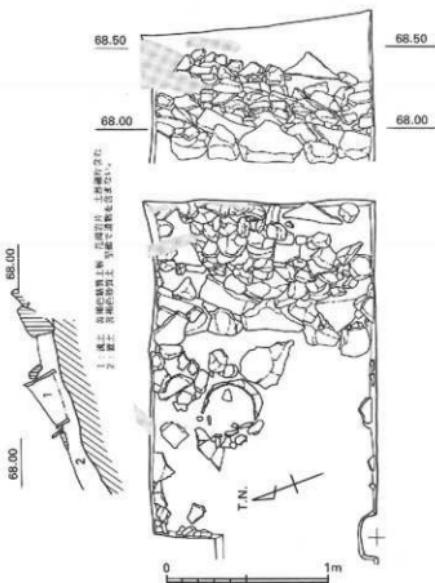
本トレンチでは葺石列とその外方に樹立された円筒埴輪1基、さらに下方で地山傾斜変換点を確認した。葺石はトレンチ東端で約0.8m幅で検出した。全体として約25°前後の勾配をもち、礫を斜めに差し込むように並べている。下端には幅40cm前後の大形の石材を一列に並べるが、それより上方は拳大へ小兒頭大かそれよりもやや大型の礫を用いている。またトレンチ中央部で一列、縦目地状の整った配列を見ることができる。使用石材種は一様ではない。花崗岩もしくは凝灰岩質の亜円礫が多用されるが、それらに混じって安山岩板石も散見される。葺石列の下端は墳丘主軸から1.4.8m、標高67.8~6

7.9mとなる。

円筒埴輪は葺石下端列から30cmほど離れた位置で検出した。底径40cm強の大型品で底部はほぼ残存するが最下段突起以上を失っている。トレンチ幅から考慮して少なくとも1m以上の間隔で据えられたものとみられる。検出した埴輪基底部は葺石外方で20°弱



第7図 第2トレンチ 平・断面図 (S=1/60)



第8図 第2トレンチ 莖石平・立面図(S=1/30)

の傾斜を持つ地山面にそのまま置かれており、掘り方は検出できない。この部分に広がる層厚20cm弱の置き土(第6図-5層)に埋め込まれている。なお埴輪周辺では置き土上面に掌大の板状安山岩が多く検出された。樹立埴輪の根固めの可能性がある。

この埴輪基底部を埋め込む置き土は葺石設置後、その下端を覆うように最大層厚20cmで3.2mの範囲に広がる。埴輪周辺以外は表面に疊を敷き詰めていた形跡はない。本層末端付近で地山傾斜の変化を読みとることができる。その位置は埴丘主軸から18.2m 標高6.7mとなる。

なお第2トレンチでは比較的多量の埴輪片を検出したが、円筒埴輪と共に二重口縁形態の壺口縁部片が認められる。出土状況から円筒埴輪同様に埴丘端部に配置された可能性が高い。

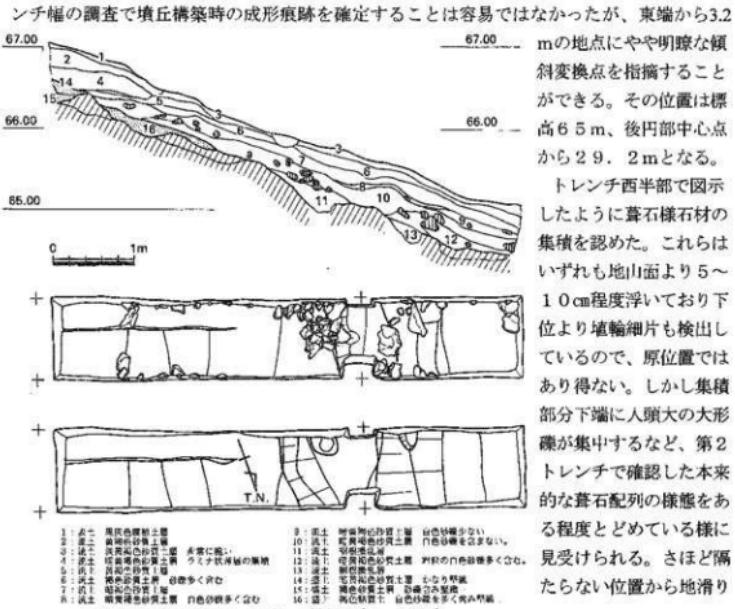
d. 第3トレンチ(第9図)

後円部西側墳裾を追求すべく後円部横断ライン上の32杭を起点に延長6m、幅1mで設定した。既に述べたように後円部西斜面の埴輪位置は地表面観察で明示することは難しい。この部分の埴丘上半部の隨所で土砂崩落が生じており、この部分の墳裾は二次堆積土に厚く覆われることが推測された。

本トレンチでは盛上端部と推測される堆積層、埴丘端部の可能性がある地山傾斜変換点および原位置からずれ落ちたと判断される葺石群などを確認した。以上は厚さ40cm~50cmの二次堆積層を除去し確認した。二次堆積層には全体に埴輪片、葺石様石材を含むが、下位に大形片がより多く含まれる傾向があった。

トレンチ東端から2mの範囲では地山直上部分に最大層厚30cmの堅緻な堆積層(14~16層)を確認した。その一部を裁ち割ったが埴輪片その他はいっさい包含していなかった。またその表層に葺石様の石材が散発的に噛み込んでいることを確認した。これらの点と層序から同層を埴丘盛土と判断した。盛土末端のレベルは標高65.7m、後円部中心点(K10杭)から2.8mとなる。

地山上面は上記の盛土部分を含めて、樹痕の影響と思われる不規則な凹凸が多く、トレ



第9図 第3トレンチ 平・断面図 (S=1/60)

状に葺石がずれ落ちたものと推測する。

またトレンチ東端から2 mの地点で盛土末端部の上面にはほぼ相当する位置より、壆形埴輪底部片を検出した。この地点に据えた確証は得られなかったが、埴輪や葺石の配置を検討する上で注意する必要がある。

e. 第4トレンチ (第10図)

後円部南斜面は全体が開墾され、墳頂部まで敵が連続しており、本来の墳丘表層部分は残存しない可能性が予測されたが、地山成形痕跡などの確認を目的として調査をおこなった。本トレンチは墳丘主軸上の4.7杭を起点に延長1.5 mで設定した。

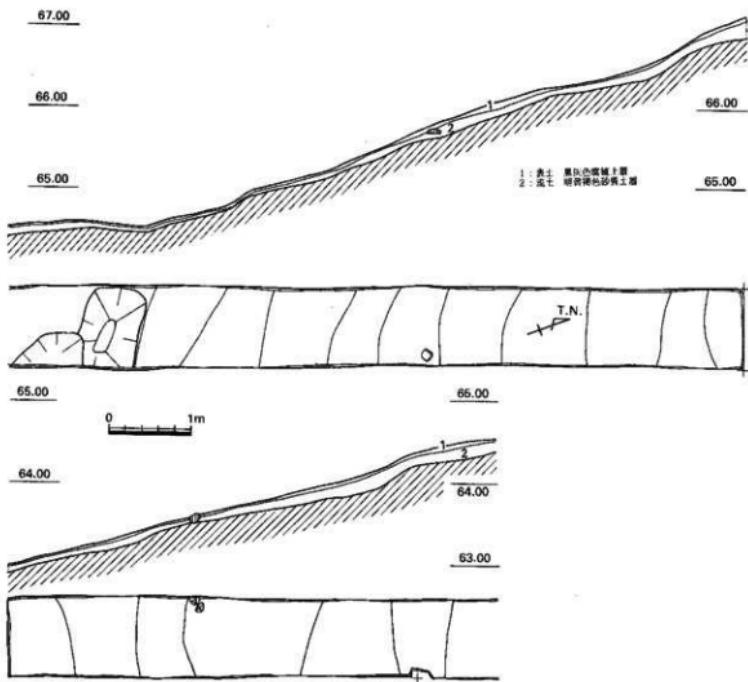
表層の薄い腐植土層を除去すると、若干の流入土を介してすぐに地山面が現れた。およそ1~1.5 m間隔で地山面が規則的に階段状に整形された開墾形跡がほぼ全体にわたって見出され、当初の予測危惧したように葺石その他の本来の墳丘外表面設備は遺存していなかった。

しかしながらトレンチ中程で上記の開墾段とは識別可能な、比較的明瞭な傾斜変換点を検出した。もとより全体の改変状況を考慮すれば厳密な墳端とは言い難いが、それを反映する可能性はさせるものである。変換点北側の地山面の勾配はほぼ20°前後となる。また変換点位置は後円部中心点(k10)から37.2 m標高64.5 m付近である。

なお本トレンチではごく僅かな埴輪細片しか出土していない。

67.00 mの地点にやや明瞭な傾斜変換点を指摘することができる。その位置は標高65 m、後円部中心点から29.2 mとなる。

トレンチ西半部で図示したように葺石様石材の集積を認めた。これらはいずれも地山面より5~10 cm程度浮いており下位より埴輪細片も検出しているので、原位置ではあり得ない。しかし集積部分下端に人頭大の大形礫が集中するなど、第2トレンチで確認した本来的な葺石配列の様態がある程度とどめている様に見受けられる。さほど隔たらない位置から地滑り



第10図 第4トレンチ 平・断面図(S=1/60)

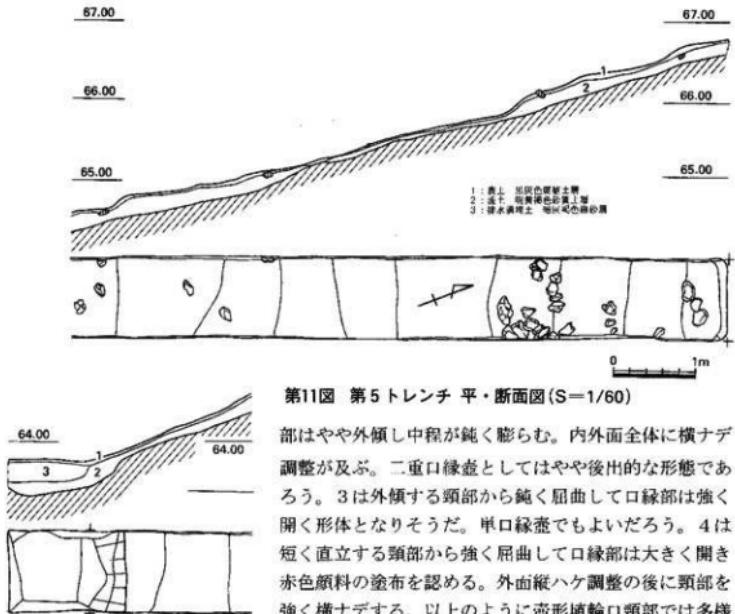
f. 第5トレンチ（第11図）

第4トレンチの所見を補足すべく、それと5mの間隔で並行する延長10mの第5トレンチを設定した。この地点では後円部南斜面としては珍しく地表面に葺石様石材が散見されたこと也有って、葺石の部分的な遺存をも期待した。

第4トレンチ同様に表層直下の浅い位置で地山面が検出された。予想以上に開墾時の改変が甚だしく、全体的に均されており本来的な墳丘外表設備は全て失われていた。第4トレンチで検出した墳端を反映すると推測した傾斜変換点も本トレンチでは見出すことはできなかった。また葺石様の石材はトレンチ北半部で一定量見出されたが、いずれも地山面から浮いており、二次堆積と推測すべき内容であった。本トレンチでもごく僅かな埴輪細片以外の出土遺物はなかった。

g. 出土遺物（第12・13図）

第11図-1は小型丸底土器（第2トレンチ）。明橙色で砂粒は多くない。短い口縁部はわずかに内湾して開きが弱い。口頸部横ナデ調整。体部内面には粘土帶接合痕をとどめる。2～5は壺形埴輪である。2は第2トレンチ出土の二重口縁部片。外面に赤色顔料を塗布する。口縁立ち上がり部は外反して長く引き延ばされている。端部は小さく肥厚する。頸



第11図 第5トレンチ 平・断面図 ($S=1/60$)

部はやや外傾し中程が鈍く膨らむ。外面全体に横ナデ調整が及ぶ。二重口縁壺としてはやや後出的な形態であろう。3は外傾する頸部から鈍く屈曲して口縁部は強く開く形体となりそうだ。単口縁壺でもよいだろう。4は短く直立する頸部から強く屈曲して口縁部は大きく開き赤色顔料の塗布を認める。外面総ハケ調整の後に頸部を強く横ナデする。以上のように壺形埴輪口縁部では多様な形体が含まれている。5は第3トレンチ出土の底部片。

接合未了のため焼成前穿孔部片のみ掲載した。底部中央に外側から径10mm前後の小円孔を穿つ。前期前半段階に本地域で壺形埴輪等の墳墓供獻上器に多用される穿孔形態である。鶴尾神社4号墳・猫塚古墳で典型的に観察される方で、本古墳壺形埴輪にも踏襲されている点は非常に興味深い。なお壺形埴輪の体部片では実用的な中形壺の形態と調整手法がそのまま観察され、製作手法上の省略はいさかも認められない。

6~8は円筒埴輪口縁部片である。いずれも第2トレンチ出土。6・7ではごく短く外反する口縁部が特徴である。また7では4方1段の長方形透かし孔がみられる。8は口縁部が多少長く外反も弱いが、中間段に比べ口縁部は短い。

第12図1~4は円筒埴輪中位部片である。1では各段で互い違いに5方の長方形透かし孔が配されている。3・4も配置関係は不詳ながらやはり長方形透かしが観察できる。5・6は底部片である。いずれも自重で底部付近が多少潰れるが、底部調査はおこなっていない。6は第2トレンチで樹立状態で検出した資料である。最下段突帯の高さは一応の目安として図上推定したものである。

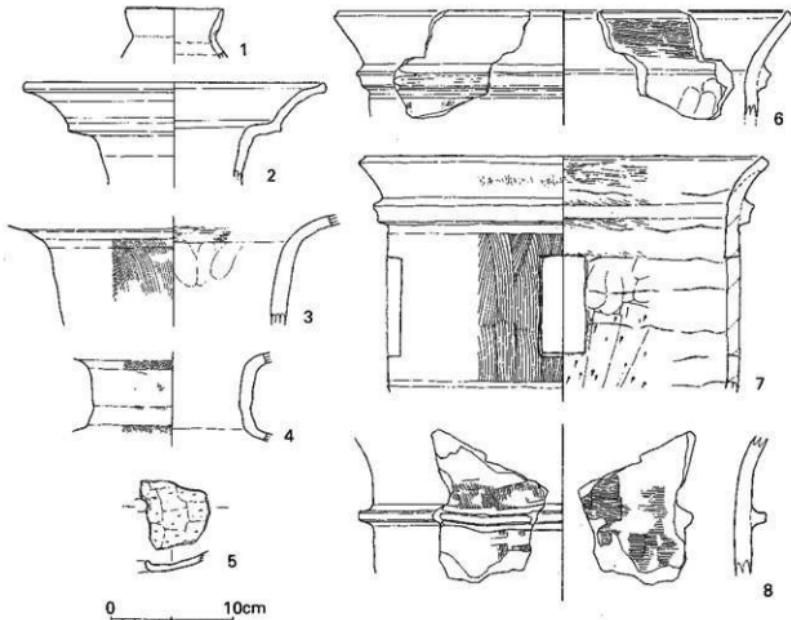
いずれも小片のため円筒埴輪の段数などは明らかにしにくいが、底径は30cm強とほぼ揃っている。また詳細は実測図に譲るが、明らかに突帯形状や外面の調整手法には一定のバリエイションが認められる。色調や砂粒混和状況も一様ではないが、それらと形態上のバリエイションとの対応関係についてはまだ充分な検討が行えていない。

以上・今次調査で採集した代表的な遺物を図示・説明した。円筒埴輪・壺形埴輪と少数の上器部小型器種が存在する。朝顔形円筒埴輪や形象埴輪、更に前回調査で採集されたような小型土製品は確認できていない。現時点で確認できるこのような組成は石清尾山姫塚古墳・同石船古墳と基本的に共通しそうだ。また円筒埴輪の形状、特に短口縁部形態や多方透し孔配置は、形象埴輪を伴う段階の岩崎山4号墳、中間西井坪遺跡、今岡古墳よりも古い様相といえるだろう。

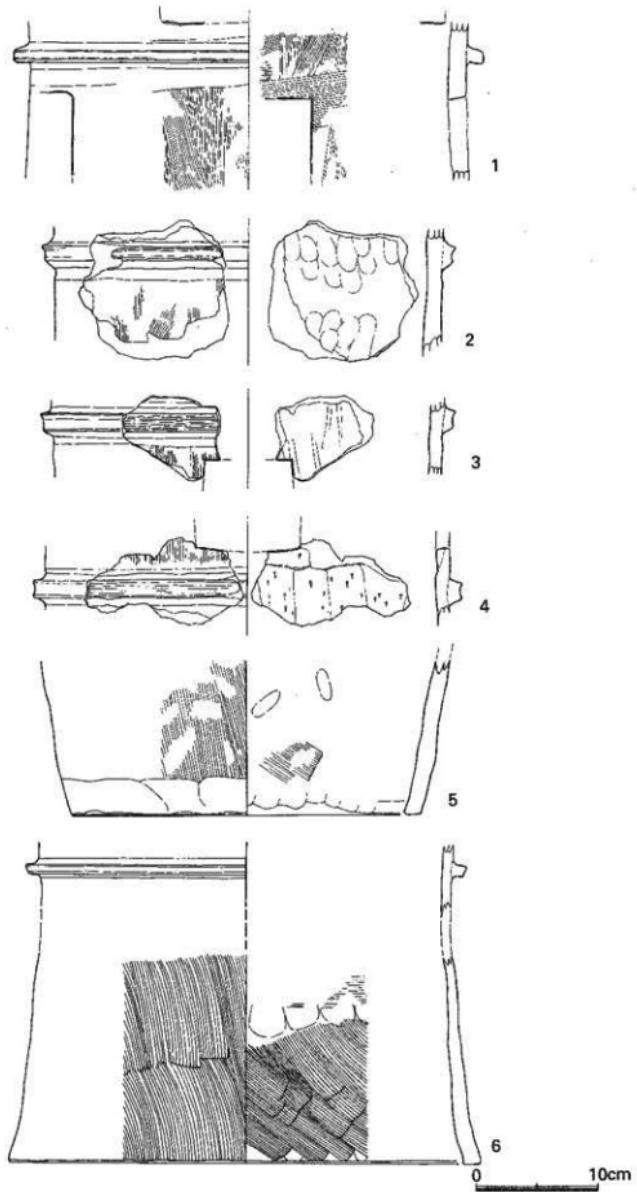
5. 本年度調査のまとめ

a. 築造時期

快天山古墳の築造時期は、これまで剣拔石棺の型式や副葬品組成から前方後円墳集成3期と推定されてきた。今回調査で一定量出土した埴輪類はこの年代觀を補強する材料となるだろう。特に普通円筒埴輪の特徴的な短口縁部形態や透かし孔の多方配置は、集成4期段階に比定される岩崎山4号墳・中間西井坪遺跡資料などに先行する要素と考えられる。また器台形円筒埴輪の欠落や、壺形埴輪と普通円筒埴輪の併用は從来から集成2期よりも後出する現象と考えられてきたものである。これらの点から快天山古墳はこれまで同様に集成編年3期に位置づけることができるであろう。したがって讃岐地域の主要前期古墳との関係では猫塚古墳・高松茶臼山古墳・野田院古墳より後出し、石清尾山石船古墳・岩崎山



第12図 出土遺物実測図1 (S=1/4)



第13図 出土遺物実測図 2 (S=1/4)

4号墳などに先行することになる。

b. 墳丘規模と形態に関する推測

前節で述べたように、今回の調査では前方部前端・後円部後端を反映する可能性がある材料を見出したものの、確定には至っていない。しかし第1・第4トレンチで提示した可能性に基づいてあえて推測値を示せば墳丘主軸長は9.9.2mとなる。前回調査で推測された墳丘規模とほぼ一致する値である。後円部東西径は第3トレンチの所見を参考に一応の目安を示せば5.8~5.9mとなろうか。南北径は第4トレンチ推定墳端位置から見て、これより10m程度大きな値が想定される。なお後円部高は第4トレンチ推定墳端から測って10.8mとなる。前方部幅も同様に第2トレンチデータを単純に折り返した目安値を示しておけば、くびれ部に接したこの部分で最大3.6m前後となる。(葺石範囲は幅3.0m弱となる。) 前方部前端幅は第1・第6トレンチの所見から推測することは困難だ。

繰り返すが以上の数値は暫定的な目安として示したもので、今後の調査によってより精緻なデータに置き換えていくことになる。したがって現時点で墳丘形態に関する議論は時期尚早であるが、二三の見通しを述べておくことにしたい。

まず後円部は尾根線方向を長軸とした楕円形を呈する可能性が高い。またこれと関連して後円部径に比べ前方部長が相当に短い形態が予測される。推定墳長から判断して後円部径の1/2強程度であろうか。

後円部南端の墳端レベル6.4.5mに対して前方部前端では7.3.1mと8.6mも高くなる。後円部西側では墳端レベルは南端とほぼ一致しており、これより北側で前方部第2トレンチ付近では約2m上がり、そこから更に前端まで6mほどせり上がる。自然地形に制約された現象であるが、讃岐地域の前期前方後円墳、特に前半期の事例で相当に普遍的に観察できる特徴でもあり注意したい。

謝辞

本年度の快天山古墳測量調査・確認調査と資料整理を通じて快天山古墳調査検討委員会の諸先生方から有益なご助言を頂いた。また調査時に様々な便宜をお計りいただいた快天山古墳地権者および富熊農村研修センターの方々に御礼申し上げたい。さらに調査実施に一方ならぬご支援を頂いた古瀬清秀・北條芳隆の両氏、ならびに現地で種々ご教示いただいた宇垣匡雅・片桐孝浩・河本清・加藤優・岸本道昭・久保田昇三・藏本晋司・佐藤竜馬・富田尚夫・信里芳樹・乗松真也・古瀬清秀・北條芳隆・正岡陸夫・松本敏三・松本和彦・安川農史・山元敏裕の各氏、調査に参加・協力された九州大学考古学研究室・徳島大学考古学研究室の学生諸氏にあわせて感謝申し上げたい。



図版1 第5トレンチ後円部南(南から)



図版2 第3トレンチ：後円部西(西から)



図版3 第1トレンチ落ち込み部埴輪出土状態(北から)



図版4 第1トレンチ落ち込み(西から)



図版5 第1トレンチ落ち込み(北から)



図版6 第6トレンチ(西から)



図版7 第2トレンチ葺石(西から)



図版8 第2トレンチ埴輪樹立状態(南から)



図版9 第2トレンチ葺石と埴輪(南から)



図版10 第4トレンチ傾斜交換点(東から)

定連池東丘古墳群

第三章 定連池東丘古墳群試掘調査

調査対象地	綾歌町栗熊西字熊倉
調査期間	平成13年6月9日～11月22日
調査面積	90 m ²

1. 地理的環境

綾歌町は、香川県のはば中央に位置し、高見峰、猫山、城山の連山を南限として、北側には肥沃な丸亀平野が広がる。

町域の北側は低丘陵を境にして飯山町と接し、また、北東部は横山連山を境に坂出市と接しているため眺望は遮られている。一方、北西部は、土器川流域の沖積平野に向かって幾筋もの洪積台地の尾根筋が延びており起伏に富んだ地形を形成している。

また、町の中央部は、南方の連山に源を発した大東川水系に沿って盆地状の沖積平野が広がっている。

このように、綾歌町では、地形・気候・水利に恵まれ、生活するには非常に適していることもあり、古くから人々の生活が営まれていたようである。

また、綾歌町からは、堤山北裾の低地を抜けると容易に綾川水系の沖積平野である羽床盆地にたどり着くことができるので、この地域とは密接に交流を行っていたと推察できる。さらに、大東川水系で結ばれた海浜部との交流も行われていたと推察できる。

定連池東丘古墳群は、大東川水系の水源でもある綾歌町南部の猫山連山から北に派生する尾根上に位置し、同尾根上には、弥生時代庄内式併行期の墳丘墓である定連遺跡、後期古墳の熊倉池東丘古墳や畦田古墳群が所在する。西側の谷を隔てた尾根上には、町内最大の横穴式石室を有する後期古墳の宇門神社古墳や弥生から古墳時代にかけて築造された平尾墳墓群が所在する。

2. 歴史的環境

綾歌町内では、ここ最近の発掘調査により行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡から縄文時代晩期の土器が発見されるようになってきた。確認されている遺構こそ僅かであるが、遺物の採取量からみても当該期には、既に多くの人々の生活が営まれていた地域であることは容易に推察される。

弥生時代に入ると次見遺跡、行末遺跡、行末西遺跡、佐古川遺跡、下土居遺跡、佐古川・窪田遺跡といった集落遺跡が確認されている他、造墓活動も活発に行われるようになってきたようで、佐古川・窪田遺跡で弥生時代前期後半から中期初頭にかけて築造された大規模な周溝墓群が確認されている。また、墳丘墓として平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が確認されている。

古墳時代に入ると、集落遺構は行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡で僅かに確認されているだけであるが、古墳についてはあらゆる所に多種多様なものが築造されるようになってくる。

尾根上には、快天山古墳、陣の丸古墳群に代表されるような有力者の埋葬施設が築造されたり、岡田台地上には車塚を中心とした数十基の中小円墳から構成される岡田万塚古墳群が形成される。岡田万塚古墳群は、早くからの開墾等によりそのほとんどが消滅してお

り、現在その姿を確認できるのはわずか6基となっている。

古代遺跡については、原遺跡、庄遺跡、北原遺跡といった集落遺跡が発見されている。

中世に入る頃には、坂出市と境界をなす横山山頂に横山廃寺が建立されたり、中世後半期には南部連山の城山に長尾大隈守元高が西長尾城を築城した。その一族は、高見峰山塊にも栗限城を築くなど規模を拡大しており、土佐の長宗我部一族が居城してからは讃岐の拠点としての役目を果たしたりと、豊臣秀吉の四国征伐により滅ぼされるまでの二百年余りその勢力を誇っていた。

各時代を通じて近隣地域との交流が行われていたことを裏付けるように、他の地域で生産されたと思われる土器も数多く発見されている。

3. 調査に至る経緯

当該地については、開発業者より平成13年2月19日付けで埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱についての照会があった。

対象区域内には、既に定連池東丘古墳群として4基の古墳が周知遺跡として報告されており、その最北端に位置する1号墳については、平成6年度に町道改良工事に伴う事前調査によって1辺9mの方墳であることが確認されている。

綾歌町教育委員会では、これらのことから確認調査の必要があるという判断のもと、地権者と協議・調整のうえ、まず踏査による現地調査を実施することとした。踏査については、平成13年6月9日に実施した。また、対象区域内における遺跡の所在についての確認が比較的容易にできる方法として、尾根上を中心とした調査とし、判断の難しいところについては、尾根の背のみならず腹部分についての調査も行った。

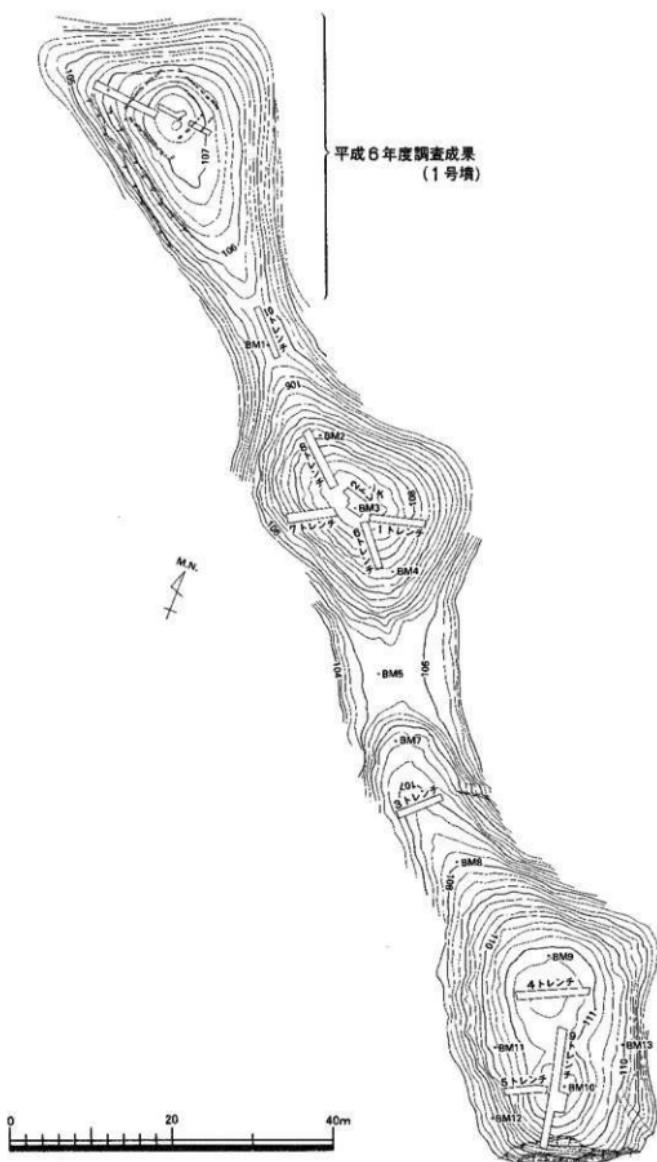
この結果、定連池東丘1号墳から南に続く尾根上に連続するピーク部分に周知の定連池東丘古墳群の内2～4号墳が所在している可能性が高く、試掘等による調査が必要であると判断した。また、これらが遺構であるならピーク間の鞍部についても土坑墓等の関連する遺構が所在する可能性も秘めているので、その点についても注意する必要がある。

また、これらのピークが連続する低丘陵を越えると、南部は顕著に比高を増していく。約100m程進んだところで標高134.5mのピーク部に到達する。その付近までは、尾根の背も幅があり古墳状のマウンドのようなものこそ確認できないが、背後に中世城郭として名高い西長尾城が控えており、このピークから1号墳の所在する尾根の先端までの地形について考察してみると、中世城郭として利用してきたものとして考えることもできる。

このピークから以南については、急激に尾根が痩せており、遺構等の施設を設けるにも不可能な状況であることから、今後の調査の必要な範囲とはしなかった。

これらの現地調査の内容を検討した結果、1号墳より南部に展開するピーク部で阿弥陀地蔵に通じる阿弥陀越えの道以北の、当初から2～4号墳の所在地とされていたポイント付近について、試掘トレンチによる調査を実施することとした。

この試掘調査は、平成13年7月9日から開始した。当面の作業として、当該地は雑木が多くブッシュ化していたため、当分の間は伐開作業をすることとなった。ある程度見通しが利くようになってから、ピーク部を中心とした平板測量及びトレンチによる確認調査を同時に進めた。その調査内容については、後述することとする。



第14図 定連池東丘古墳群 測量・トレンチ配置図 ($S=1:600$)

4. 調査結果の概要

今回の調査では、当該地に埋蔵文化財が包蔵されていることの有無を確認をするため、2号墳、3号墳、4号墳と推定される尾根上の高まり部、及び鞍部にあたる部分に試掘トレンチを計10本設定した。

まず、尾根北端に位置する1号墳より南東に約50mのところに2号墳推定地とされる最初のピーク部分がある。この頂部に2トレンチを、更に頂部を中心に四方に1、6、7、8トレンチを設定した。

更に南東部に35m程進むと、整形された鞍部を隔てて一段高くなる部分に到達する。この地点が3号墳推定地とされている。この部分には尾根に直行するように3トレンチを設定した。

この地点から更に南東にかけては上り勾配になっており、30m程進んだところで二つのマウンド状の高まりを持つピークに達する。3号墳推定地において、目視によるマウンドの確認ができなかったことからこの二つのマウンド状の高まりの内北側のものが3号墳である可能性も考えられた。また4号墳については、この二つの高まりの内、南側のものがそれであるか、二つの高まりを合わせて前方後円墳であるという可能性も考えられた。

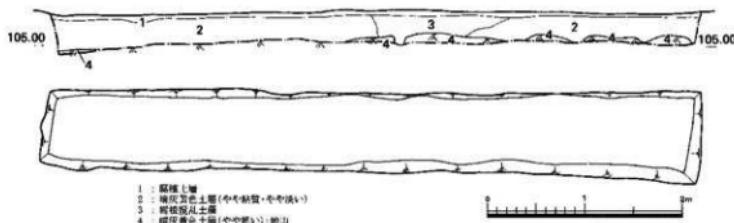
これらの予想から、北側の高まり上に尾根と直行する4トレンチを、南側の高まりを中心ではあるが北側の高まりも引っ掛けるような9トレンチを設定した。また、踏査の段階で確認していた南側の高まりの西側面に露出していた石列に沿った5トレンチを設定した。

尚、ピーク部以外の調査として、1号墳と2号墳推定地に挟まれる鞍部に10トレンチを設定した。他の部分については、後世の手が加えられている可能性が強いとして、上記10箇所に設定した試掘トレンチの内容によって検討することとした。以下、北側の遺跡推定ポイント毎についての状況を記述する。

[1～2号墳鞍部：10トレンチ]

1号墳と2号墳所在するピーク部に挟まれている鞍部に土坑墓の所在の確認の為、10トレンチを設定した。全体的に20cm前後の堆積層があり、その直下は地山となっている。堆積土は1号墳及び2号墳からの流れ込みと考えられ、盛土であることの確認はできなかった。また、遺物については土師器片が1点のみ出土したが、出土地点が樹根による攪乱

東面



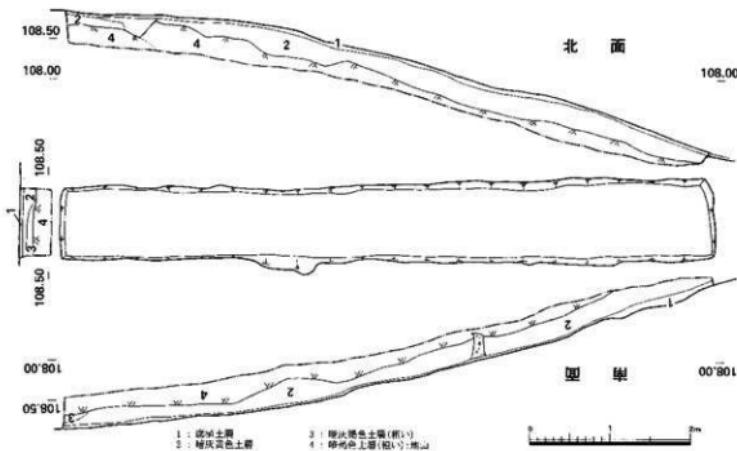
第15図 第10トレンチ 平・断面図(S=1:50)

を受けていた箇所であったことから、遺構に伴うものであるかどうかは判らない。しかしながら、10トレンチの範囲内では地山を削り込むような遺構は確認できることから、遺物は堆積土と併せて他からの流入であると思われる。

[2号墳：1トレンチ]

2号墳推定地とされるピークは地形より僅かにずれる楕円形のマウンド状の高まりが測量成果から確認できた。このことから墳丘である可能性が強く、それを確認するために数本のトレンチを設定した。この内、1トレンチは墳丘盛土と周溝を確認するためにピークの東斜面に設定した。

土層の状況は樹根による搅乱が著しく確認し難い状況ではあるが、頂部の平坦部については、表土直下が地山で墳丘に伴う盛土等の確認はできなかった。おそらく後世での削平を受けているものと考えられる。頂部から側斜面に差し掛かるところで地山を整形して粘土質層等が確認できるが、それが墳丘に関連するものかどうかの確認まではできない。その他周溝及び遺物の確認もできなかった。

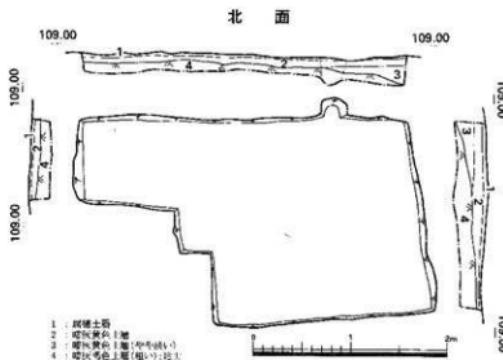


第16図 第1トレンチ 平・断面図 ($S=1:60$)

[2号墳：2トレンチ]

2号墳推定地とされるピーク頂部の楕円地形に合わせて東西方向に2トレンチを設定した。トレンチ西端では腐植土直下から地山が確認でき、1トレンチ同様後世の削平を受けていると考えられる。この地山ラインは東に向かってレベルが下がっていき、それに合わせて盛土が確認できる。盛土は上下2層に別れており、その下層からは僅かであるが須恵

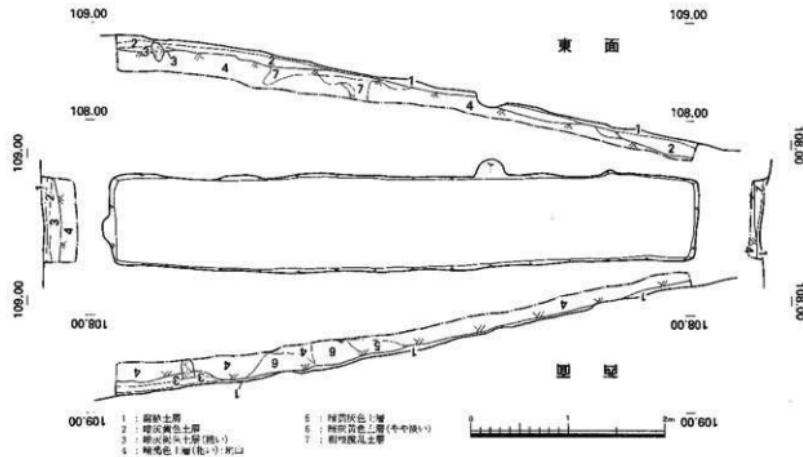
器片が検出された。磨耗が激しくため、時期の特定には至らなかった。



第17図 第2トレンチ 平・断面図 ($S=1:50$)

[2号墳:6トレンチ]

2号墳推定地のピーク部から南に延びる尾根に合わせて6トレンチを設定した。トレンチの西北端で2トレンチで確認された盛土層が確認できたが、遺物の混入は無かった。また、頂上部から斜面部に差しかかるところで安定した堆積は無くなる。トレンチ下半部で僅か



第18図 第6トレンチ 平・断面図 ($S=1:50$)

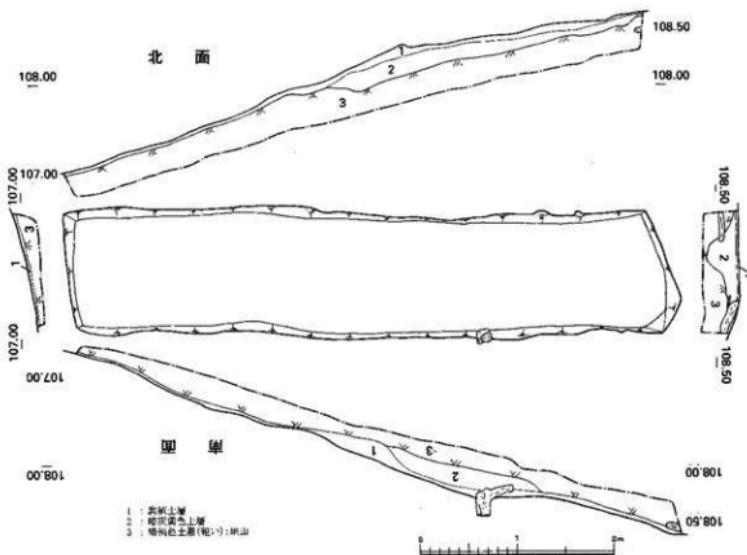
に同質土の堆積が見られるが、部分的に不安定な状態であることから、構成に何らかの削平を受けた段階で押し出されたものと考えるのが妥当であろう。

その他に地山を加工したような形跡は見られなかった。

[2号墳：7トレンチ]

2号墳推定値のピーク部から西斜面にかけて7トレンチを設定した。樹根による搅乱が激しく確認がとりにくかったが、地山は自然傾斜で特に加工の形跡は認められなかつた。元来急な傾斜角であること及び地質が比較的粘性が弱く脆いことから、人的な手を加えるのには難しい状況である。

トレンチ中段あたりに僅かなテラス状の傾斜変換点が見られ、この点より上部には2トレンチ及び6トレンチで見られた堆積土が確認できるが、一層であり版築等の確認ができるないことから古墳の墳丘に伴うものとは断定できない。恐らく6トレンチの下半部と同様の後世の押し出しによるものと考えられる。



第19図 第7トレンチ 平・断面図 ($S=1:50$)

[2号墳：8トレンチ]

2号墳推定値のピーク部から北西の1号墳へ続く尾根の斜面にかけて8トレンチを設定した。他のトレンチと同様に上層部は樹根による搅乱を受けており、その下部に自然傾斜

での地山が確認できた。また、下半部でも他のトレンチと同様に版築ではないが堆積土が認められた。

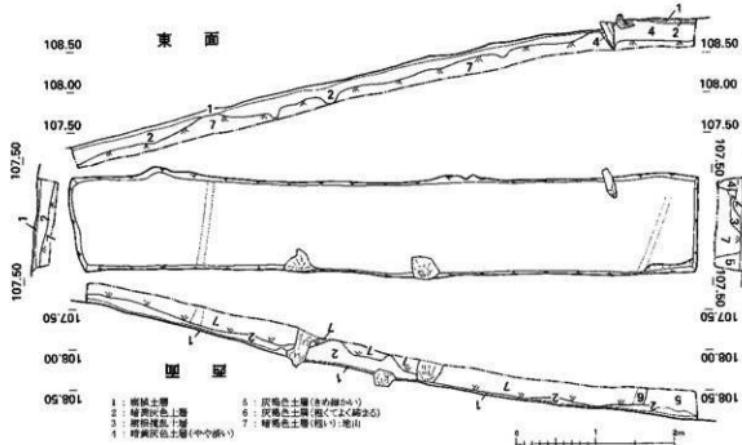
他のトレンチでは明確な遺構が確認できていないが、この8トレンチでは頂部で主体部であろう土坑墓を2基検出した。また、この2基の土坑墓は80cmの間隔で並列している。

西側のものは、地山を削り込んでおり、埋土は灰褐色のきめ細かいもので充填されていた。木棺の痕跡も見られないで元來の土坑墓であったようである。

東側のものは、北端の小口部に地表にも露出するような形で板石が設けられており、側面は全体が組合せ式の石棺になっているのか、側壁のみ木板が使用されているのか、材質こそ確認できていないが地山を切り込み、底部を据えたものであることが判った。

尚、東側の土坑墓の周辺でピンボールによって地下の確認をしてみたが同様の石材の発見には至っていない。2号墳は、後世の手が加えられているようなので石材があったとしても抜き取られていることも十分考えられる。

いずれにしても、2号墳については、遺物が無く時期の特定はできないが、埋藏文化財であることが判明した。



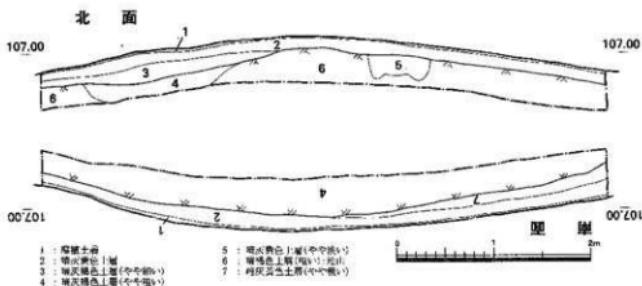
第20図 第8トレンチ 平・断面図 ($S=1:60$)

[3号墳：3トレンチ]

2号墳より南約37mに位置する3号墳推定地では、尾根に直行して3トレンチを設定した。頂上部では、腐食土直下、地山の上部に堆積土が見られるが、全体が一層で構成されており古墳に伴う盛土であると考えるよりは自然堆積土が後世の開墾等で人工的に形成されたものと考えた方が自然である。

只、一箇所のみ土坑墓である可能性を持つ地山を削り込む層が確認できた。遺物の混入

が無いこと及びトレンチの北壁のみにしか見られないことから確実性に欠けるが3号墳の可能性があると思われる。



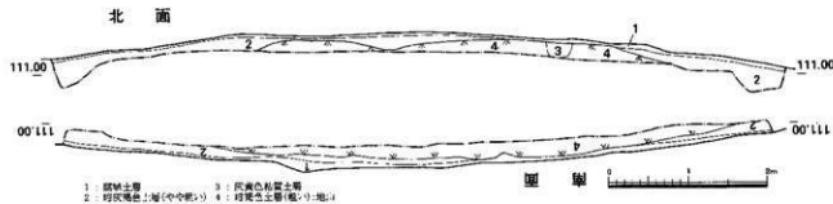
第21図 第3トレンチ 断面図 ($S=1:50$)

[4号墳：4トレンチ]

3号墳推定地から南に28m程進むとマウンド状のピークに到達する。更に10m程南にもマウンド状の高まりがあり、可能性としては①北側のマウンドと南側のマウンドが別体の古墳②両方のマウンドが合わさって前方後円墳という2つの想定を考えた。

まず、北側のマウンドの構造を確認するために尾根に直行する4トレンチを設定した。腐植土直下に部分的な堆積土は見られるが、地山で構成されており人の加工の痕跡は見られない。元来はもっと尾根の中心部が高まっている丸みを帯びた尾根だったようで、東西の両斜面が開墾等によって押し広げられているようである。

遺物の確認もできなかつたことから遺跡である可能性は無くなった。



第22図 第4トレンチ 断面図 ($S=1:60$)

[4号墳：5トレンチ]

南側のマウンドの西斜面には、先に行った現地踏査時に列状に並ぶ石材の露出を確認していた。この部分が、古墳に伴う石室への羨道部である可能性が非常に強いとしていたことから、石列に合わせて5トレンチを設定した。

腐植土を除去すると露出していた石材は殆ど浮いている事が判った。しかしその下部には、

極めて安定した石列を確認することができた。石列を確認しながら掘り下げていくと埋土の中から須恵器杯片を検出した。また須恵器壺片も併せて検出した。他にも須恵器片が検出されており、それらの形状から6世紀末の所産であると判明した。

但し、遺物は羨道部の埋土中から発見されたもので地山からは相当浮いていた。更に、その埋土も層に分類することができない事から一気に埋まっておりその当時の墳丘上にあった遺物であるか崩壊時に投げ込まれたものであるので、本古墳が築造されたのはそれ以前ということになる。

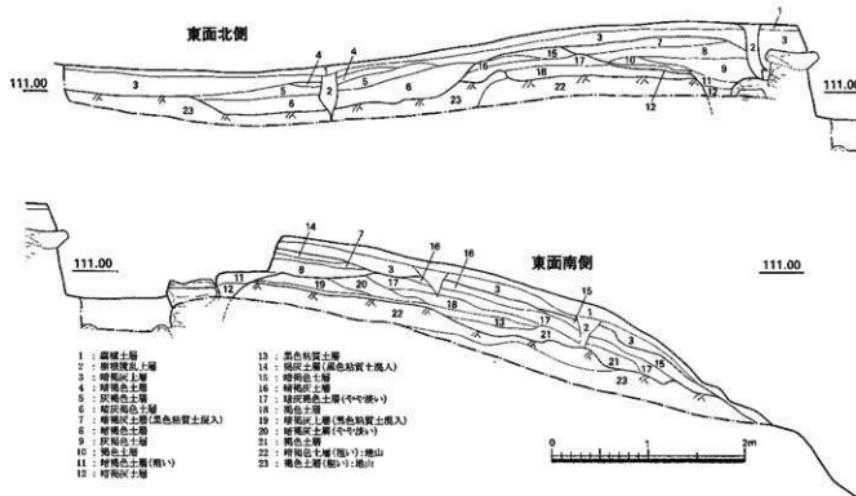
羨道部の側壁は、人頭大よりやや大きめの石材が多く使用されており、その殆どが河原石であることから付近の河川から持ち込まれたものであろう。

[4号墳：9トレンチ]

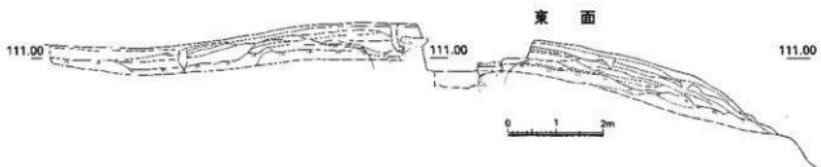
南側のマウンドの西斜面の羨道部については、5トレンチによって内容が確認できた。更に主体部の確認をとる為に頂部に9トレンチを設定した。

9トレンチからは、5トレンチで確認した羨道部の側壁から続く石列を確認し、その石列はやや広がりを持って石室の玄室へと続くようである。残念ながら石室の上半部は後の盜掘か開墾等によって破壊されており残存するのは、最下段から4、5段程度であることも判った。

また、土層を観察すると墳丘を版築した後の石室の側壁を構築する際の掘削ラインや石室の裏込土の確認もできた。



第23図 第9トレンチ断面図[分割] (S=1:50)



第24図 第9トレンチ 断面図【全体】(S=1:100)

更に、北側については周溝であろう落ち込みも確認することができた。南側については、既に近世の掘削によって当時の地形が残っておらず判定が困難であるが周溝であろうという遺構の確認はできなかった。

本古墳の規模としては、明確な形状は判らないが直径9~10m、その周囲に幅2m50cm程の周溝を備えた円墳である可能性が強い。また、主体部は底部幅2mを計る横穴式石室を持ちその西側に羨道部を備えた後期古墳であることが判った。

以上が、今回の試掘トレンチの内容である。また、併せて行った地形測量調査については、平板測量とし、コンターラインは25cm間隔とした。その成果を、平成6年度に実施している1号墳付近の地形測量図と合わせることによって、より効率的なものとした。

尚、前述したが、当地付近については中世城館の施設として利用されていた可能性もあるのでその地形を縄張り図として図化した。



第25図 熊倉縄張り図 (S=1:2,500)

5.まとめ

調査地は、町南部の連山から派生する尾根上に位置し、周囲には平尾墳墓群をはじめとする墳丘墓や畦田古墳群などの古墳が、数多く点在する地域内にある。

定連池東丘古墳群は、周知の古墳であり、1号墳は、平成6年の調査で古墳の所在が確認されていたが、他の3基については未調査であった。このため、3基の古墳について、

遺構の確認調査を実施した。1号墳は、古墳時代前期後半から中期初頭に築造された1辺9mの方墳であることが確認されていることから、同時期の遺跡の可能性を中心に調査を進めた。

その結果、2号墳については主体部に土坑墓2基を持つ古墳であること、3号墳については土坑墓である可能性があるという内容であった。いずれも地形の改変が行われているようで保存状態としてはよくない。

4号墳は、直径9～10mの墳丘を持つ円墳の可能性が高く、自然地形の尾根上の北部を周溝状に掘り下げ、墳頂部に墓壙を配置し、盛土整形が成されていたであろう。

主体部は、後世の擾乱を受け天井石及び側壁の上部を欠くものの、西方に向けて1m以上の羨道部を持ち、方袖または両袖式の横穴石室である可能性が高い。

出土遺物としては、羨道部より須恵器杯片と須恵器甕片が、主体部擾乱土中より須恵器甕の体部片が出土した。

築造時期については、出土遺物の杯の形状、及び主体部に横穴式石室を持つこと、羨道部が短いこと等から考察して、古墳時代後期に築造されたと考えるのが妥当であろう。

以上のことから、定連池東丘古墳1号墳は、未盗掘の町内では貴重な方墳であることから現状保存、その他のものについても現状保存を望むが、既に相当程度の破壊が進んでいることから今後の開発業者との協議の中で開発計画の変更ができない場合は、記録保存もやむを得ないと考える。



図版11 伐開作業風景



図版12 第3トレンチ完掘状況(東から)



図版13 第8トレンチ完掘状況(西から)



図版14 第8トレンチ検出土坑墓(北西から)



図版15 第5トレンチ羨道部側壁(西から)



図版16 第9トレンチ填丘断面(西から)

第IV章 ま と め

綾歌町では、平成8年度から国庫及び県費補助事業により綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても継続して実施することになった。

今年度については、栗熊東字若狭地区快天山古墳及び栗熊西字熊倉地区定連池東丘古墳群の2地区を対象に調査を実施した。

快天山古墳は、昭和25年（1950）香川県教育委員会によって主体部を中心とした発掘調査が実施されており、その内容は、史跡名勝天然記念物調査報告第十五（1951）で報告されている。

さらに、翌26年京都大学考古学教室によって再調査が実施された。その報告書はこれまで未刊となっていたが、元京都大学教授樋口隆康氏のご厚意により本年度発刊を迎えるに至った。

今年度の調査は、過去の調査で確定されていなかった墳丘の形態及び規模の確定を目的としており、墳丘の測量調査及び第1次の墳丘確認調査を実施した。測量調査では、周辺地形を重視して快天山古墳の周囲約南北150m×東西約100mの範囲を、平板測量方式で縮尺1:100、コンターラインは25cm間隔で図化した。墳丘確認調査では、後円部南側及び西側、前方部西側及び前方部北側の4地点に計6箇所のトレンチを設定し、断面土層及び包含遺物による構造分布確認調査を行った。

この結果、墳丘形態では、前方部西側くびれ部付近で葺石列とその外側で樹立した円筒埴輪1基が確認され、快天山古墳は前方後円墳であることが確定した。墳丘規模は、前方部前端部の落ち込みを確認したことと、後円部墳端と考えてもよいと思われる地山の傾斜変換点が後円部後端と後円部西側で確認することができたことから判断すると、全長100m、後円部径約60mとなる。また、今回の調査で一定量出土した埴輪類の分析の結果、築造時期はこれまで同様に集成編年3期に位置づけられることが確認された。

今年度の調査では、墳丘形態における全容の解明とまでは至らなかったが、次年度以降も継続して確認調査を実施し、構造等の内容を明確にし、早期の整備を目指したい。

定連池東丘古墳群は、町内事業者から、開発計画の事前協議により埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があり、遺跡地図及び踏査による分布調査の結果に基づき、地形測量調査及び試掘確認調査を実施した。

対象地区北端に位置する定連池東丘1号墳は、既に平成6年度に確認調査が実施されており、古墳時代前期後半から中期初頭にかけて築造された1辺9mの方墳であることが確認されている。

今回の調査では、1号墳より南部に延びる起伏に富んだ尾根上で、事前踏査で調査が必要とした範囲の平板測量調査と、その区域内で從来から遺跡台帳で示されている定連池東丘2~4号墳を中心に試掘トレンチを計10本設定した。

この結果、遺跡地図及び台帳で2号墳及び3号墳とされていた地点については、後世の

削平等によって墳丘墓であるかどうかは不明瞭であるが、2号墳推定地では並列する2基の土坑墓を、3号墳推定地では土坑（墓）を1基確認した。しかし、包含する遺物が検出されていないことから時期その他の概要を摑むことはできていない。

4号墳推定地は、元々尾根西斜面に石材が露出していたことから墳丘残存の可能性が高かった。トレーナによる調査の結果、露出していた列石は横穴式石室羨道部の側壁であることが確認された。更に調査を進めることによって径10m前後の円墳であることが判った。また、本古墳は周溝を備えており、築造時期については、羨道部の埋土ないで検出した須恵器から判断すると古墳時代後期の所産であると考えてよいであろう。ただ、後世の擾乱を受けており石室上半部の石材及び天井石等の検出はできず保存状態としてはよいものではなかった。

本古墳の取り扱いについては、開発業者との協議の結果、記録保存とすることとなり今後本調査が予定されている。

以上、今年度は上記2遺跡の調査を実施した。定連池東丘古墳群については、開発を伴う事前確認調査として、また、学術調査として快天山古墳の測量調査及び墳丘確認調査を実施した。

快天山古墳の調査については、今年度の成果だけでは不足部分が多く次年度以降も継続的に調査を進め、史跡指定に向けた資料整備を行うとともに、保護・活用に向けた体制強化を進めていきたい。

また、今後の開発計画についても、この調査成果に基づき的確な遺跡の保護についての、提示をするとともに、事前協議を進めていき、文化財行政の活用・保護についての貴重な資料となるべく努めたい。

報告書抄録

ふりがな	あやうたちょうないいせき はつくつちょうさ ほうこくしょ							
書名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成13年度国庫補助事業報告書							
卷次	2002.3	シリーズ名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書		シリーズ番号	第6集		
編集者名	綾歌町教育委員会 近藤 武司 新居 勉 大久保 徹也							
編集機関	綾歌町教育委員会							
所在地	〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西 1638 Tel0877-86-5963							
発行年月日	2002年3月31日							
頁数	例言・目次等	本文	図版	挿図	総頁			
	5頁	34頁	16枚	25枚	39頁			
ふりがな 所収遺跡名	所在地 市町村	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		遺跡番号	○○○	○○○				
快天山古墳	綾歌町栗熊東字若狭916-1	37384	00003	34度 13分 57秒	133度 53分 30秒	2001.4.2~ 2001.8.10	60	遺跡分布調査
定運池東丘古墳群	綾歌町栗熊西字熊倉217-1	37384	00005~ 00008	34度 12分 30秒	133度 53分 10秒	2001.6.9~ 2001.11.22	90	資材置場造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
快天山古墳	古墳	古墳時代前期	墳丘 割竹形石棺 葺石		円筒埴輪 壺形埴輪			
定運池東丘古墳群	古墳	古墳時代前期 ~後期	1号墳 方墳・組合石棺 2・3号墳 土坑墓 4号墳 円墳・横穴式石室		須恵器杯・壺 須恵器片			

平成13年度国庫補助事業報告書
綾歌町内遺跡発掘調査報告書

平成14年3月31日

編集・発行：綾歌町教育委員会

綾歌郡綾歌町栗熊西1638

電話(0877) 86-5903

印刷：四国工業写真社